

川崎の身近なものづくり企業の紹介



川崎から世界へ 口コミで広がったハンドクリーム ユースキン製薬株式会社

現在のユースキン製薬本社。研究開発もこのビル内で行われている。

オレンジ色のパッケージでおなじみの黄色いハンドクリーム「ユースキンA」を製造するユースキン製薬は、創業者である野渡良清氏が川崎区で営んでいた町の薬屋から始まった。

「ある日、一人の主婦がひどい手あれで薬を買いに店を訪れました。その声がきっかけとなって誕生したのが、日本初の医薬品ハンドクリーム『ユースキン』（現在の『ユースキンA』）です」（ユースキン製薬 広報宣伝チーム 高橋千明さん）

当時、ひびやかざねなど手あれの薬としては、保湿作用を持つワセリンが使われていた。ただ、ワセリンは油であり、べたべたしてほこりがついたり、食器や布団についてしまうため、使いにくいというのだ。そこで、野渡氏は水と油を混ぜる乳化技術を研究していた綿谷益次郎博士に相談して、手あれに悩む人のために、効き目がありながらも手になじみやすくべたつかないクリーム、ユースキンを開発した。

意外なことに、ユースキン製薬では、テレビなどを使った大々的な宣伝は、ほとんど行っていない。その代わりに重視しているのが、口コミだ。薬屋さんの店頭サンプルを置いてもらい、お客様に使ってもらうことで、効き目が評判となり、次第に広まっていった

という。創業当初は、社長が自ら製品を自転車に積んで川崎市内から横浜、東京まで走り回った。今でも社員が、全国の薬局を回っては、お客様の声に耳を傾けている。

「ユースキン製薬は川崎で生まれ、地元の皆様に支えられて育った会社です。今後もずっと川崎を拠点に活動していきます」（同）

誕生以来50年以上がすぎたユースキンAは、小さな改良を何度か行っているが、基本的な成分はほとんど変わっていない。

「ユースキンAは、単なる保湿クリームではなく治療効果があるクリームです。保湿を与えるグリセリンのほかに、炎症を抑えるグリチルレチン酸、血行を促進するビタミンE、カンフルなどの薬効成分と独自製法による基剤により、肌あれが治るクリームにしています」（ユースキン製薬 研究開発部 飯野隼人さん）

その後もかゆみやしっしんに効く『ユースキンI』や、敏感な肌向けの『ユースキンS』など新しい商品も開発。人々の肌を守って長く愛される製品をつくることで、うるおいのある社会づくりに貢献するという同社の理念の実現のために、今日も川崎の地で研究が進められている。



今や国内だけでなく世界20か国以上で販売されている『ユースキンA』。



昭和30年代に川崎区貝塚で営んでいた薬店の様子。

ユースキン製薬株式会社
〒210-0014 川崎市川崎区貝塚 1-1-11 TEL 044-222-1412
<http://www.yuskin.co.jp/>



商社からメーカーへ 知る人ぞ知る洗浄機のパイオニア 株式会社協同インターナショナル

宮前区宮崎の本社。川崎市内にはこのほか、3か所に拠点がある。

協同インターナショナルは、小さく砕いたドライアイスの粉末を吹きつけることで精密な機械などの洗浄を行うドライアイスブラスト洗浄機を製造・販売している。ドライアイスは固体から気体になる際に体積が750倍に膨張する。その勢いを利用して表面についたよごれを引きはがすので、キズをつけずに洗浄することができる。また、ドライアイスは液体にならずに昇華するので、有害な廃液を出すこともない。ちなみに、ドライアイスは、石油化学工場などから排出される二酸化炭素を回収してつくられる。

「自動車や工場の大型機械を洗浄する場合は3mm程度のドライアイスを使いますが、われわれの洗浄機は、直径0.3mmの小さなドライアイスを使用します。精密な電子部品なども傷をつけずに洗浄できるところに、独自のノウハウがあるのです」(協同インターナショナル 電子部長 湯川弘之さん)

同社はずっと、先代の社長が28歳の時(1970年)に「日本にないものを世界から輸入する」商社として創業した。最初は雑貨などを輸入していたが、1970年代に日本ではまだ少なかった畜産・酪農関係の設備や、半導体製造用の材料や装置を輸入して販売することで、大きく成長したという。

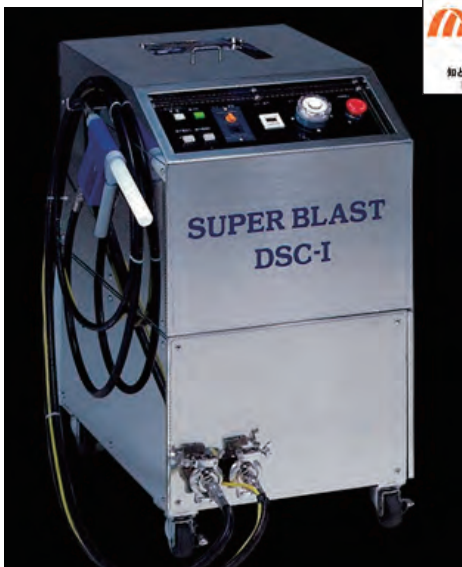
1982年には業務拡大のため、本社を東京・港区から川崎市に移転する。

「事業所や工場は地方にもありますが、本社や研究開発部門などの中枢機能は川崎市内にあります。川崎市を選んだのは、半導体関係の工場や研究施設が数多くあるからです。東名高速道路にも近く、地方に車で移動するのも便利です」(同)

また、海外の製品を輸入して売っているだけでは限界があることから、1985年には社内に設備を導入して半導体微細加工事業を開始する。さらに、その延長として1999年には半導体製造装置用のドライアイス洗浄機を開発して、製品化にこぎつけた。2000年代に入ってから、バイオ事業や、半導体製造装置の技術を応用発展させたナノインプリントなどの超微細加工事業へと、次々に業務領域を広げていった。

その一方で、1997年には輸入が解禁されたイタリア産の生ハムの販売を開始し、現在は輸入だけでなく宮崎県で製造も行っている。

常に新しい分野に目を向けてチャレンジを続けてきた協同インターナショナルは、今後も業種や国境などの壁を乗り越えて、活躍の場を広げていくことだろう。



第5回川崎市ものづくりブランドに認定されているドライアイスブラスト洗浄機。

株式会社協同インターナショナル

〒216-0033 川崎市宮前区宮崎 2-10-9 TEL 044-853-2611

<http://www.kyodo-inc.co.jp/>



旅先で出会って惚れ込んで、輸入が自由化される前から交渉をはじめたというイタリア産生ハム。



ホタテの貝殻を使った 人と環境にやさしいダストレスチョーク 日本理化学工業株式会社

高津区の工場は、障がい者多数雇用のモデル事業として国から表彰されている。

日本理化学工業は、学校などで使われるチョークを75年にわたってつくり続けている。チョークは、白い粉末を粘土のように練ったものを固めたものだ。かつては原料として石膏（硫酸カルシウム）だけが使われていたが、粒子が軽く飛散しやすかったため、黒板に書いたり消したりした際に出る粉から人体への影響を気にする傾向もあった。

「昭和10年頃、アメリカには害の少ない石灰石（炭酸カルシウム）を原料にしたチョークがあることを知りました。それを日本でもつくりたいと、独自に研究を重ねて昭和12年に開発したのがダストレスチョークです」（日本理化学工業 代表取締役社長 大山隆久さん）

石灰石は貝などの生き物の化石で、体内に入ってもほとんど害がない。また、石膏に比べて粒子が重いので、粉が散りにくく吸い込みにくい。川崎市立の小中学校で使用しているチョークは、すべてダストレスチョークになっている。

さらに、現在のダストレスチョークには、養殖したホタテ貝の貝殻を粉末にした炭酸カルシウムが混ぜられている。

「ホタテの貝殻は石灰石よりも白く、粉末にしても小さな構造が残っています。そのため、チョークに混ぜ

ると黒板に書いた文字が見やすく、折れにくくなります。さらには、北海道の水産加工工場から出るホタテの貝殻を再利用しているため、資源リサイクルにも役立っています」（同）

同社には一つの特徴がある。社員の70%に知的障がい者を雇用しているのだ。障がい者の雇用は昭和30年代からはじめていたが、昭和50年に障がい者多数雇用モデル工場にならないかという誘いを受けて、川崎市へ移転してきた。採用初期はとまどうこともあったが、あらかじめ決まった作業手順を教えるのではなく、社員ひとりひとりの能力に合わせた作業のやり方を考えることで、障がい者でも健常者と同じように働けることに気づかされたという。

工場には、それぞれの担当者に合わせた道具が用意され、絵や色を多用して示された手順を確認しながら作業できるように工夫がされている。

『誰かに支援されるだけではなく、自立して働いて誰かの役に立つことで幸せになります。そのような従業員みんなの幸せなくしては、会社の発展ありません。私たちは、障がい者でも、健常者と同じように働けることを社会に向けて発信してゆくことで、社会に貢献したいと考えています』（同）



粉が散りにくい「ダストレスチョーク」。

ホワイトボードなど、どこにでも書いて何度でも消せる揮発しない固形マーカー「キットパス」。第2回川崎ものづくりブランドに認定されている。



日本理化学工業株式会社
〒213-0032 川崎市高津区久地 2-15-10 TEL 044-811-4121
<http://www.rikagaku.co.jp/>